

---

# ダイアモンドの恋

愛乃 咲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダイアモンドの恋

### 【Zマーク】

Z9325F

### 【作者名】

愛乃 咲

### 【あらすじ】

初恋もまだの日野灯。高校1年生。おとなしい性格でチビだからなのか?3年のお姉さま方にいきなり囮まれてしまう。なにやら有名人の彼女アリの「真先輩」とやらに、灯がしつこくつきまとつているらしい?そんな覚えはまったくないどころか…真先輩と話したこともないんですけど…?片思いすらしてないのにこんなんアリ!?

## 第1話 ～春先にバケツ水～

何で

こういう事に  
まき込まれちゃつたんだねつへ

田の前には

綺麗系のお姉さん方が5人。

怖い目で睨んでいる。

…だけならまだいいんだけど。

「あんたなんか、  
真に似合わないんだよ」

「たいして可愛くもないくせに」

「真には坂田亜季つていう

れつきとした彼女が  
いるんだからね！」

口々にそう怒鳴られる。

まこと  
真つていうのは

まこと  
学年が2年の先輩。

まこと  
佐藤真。

頭のいい、  
ちょっと怖い感じの人だ。

人気があるっていうのは  
見ただけでわかつた。

あたしのクラスにも  
ファンがたくさんいる。

あたしが真先輩に似合わないのも知ってるし。

たいして可愛くもないのなんか知ってるし…。

さかた あき  
坂田亞季さんだって見かけた事はあるし…。

だけどね。

真先輩は  
あたしと何も関係が無いし。

そりや、  
確かにカッコいいなあとは  
…思うナビ。

好きとか。

そういう気持ちなんてない。

それを言おひ言おひって  
してるんだけど。

ぜんぜん口を挟めない。

ひの  
日野灯 高校1年。

どににでもいる  
平凡きわまりない  
地味めの女の子。

ちょっと近眼でメガネ。チビ。

「コントラクトは  
アレルギーっぽくて、  
合わない。」

髪型は…

肩までの髪を  
横でひつつめてる。

色は染められない校則。  
だから。真っ黒。

何だから客観的に考えてて…  
イヤんなつたくらい普通。

「ひょっと聞いてるのーー?」

いけない。手が…。

田の前の  
茶髪の女の手の手が  
上がる。

と身を竦めたんだ。

殴られる。

そしたら。

ばしゃん。

つて。

冷たさと同時に音がして。

あたしは  
ずぶ濡れになつて、  
そこに居た。

＊＊＊

「困つたな……。」

彼女達は笑いながら、  
去つていつて。

あたしはそれで  
解放された形になつた。

女子トイレの個室で  
体操着のジャージに着替えて。

でも。

こんな姿で帰れない。

お母さんが何て言つが……。

心配かけちゃうし。

まるで苛められたみたいな……。

つて。あれ?

これって……  
イジメ……なのかな……?

喉の奥がツンツンって痛くなつた。

ダメ。

泣きそう。

こんな  
訳のわからない事でなんか  
泣きたくない。

なんで?

なんでこんなことになつたの?

気にさわること、  
あたし、したかな?

## 第2話 ～桜井涼の来襲～

次の日はいつもの朝。

昨日あんなことがあつたけど  
あたしはいつものとおりに  
登校してる。

…学校休むくらいの  
纖細さがないのは

我ながら  
どうかしてるんじゃないかとは  
思つてゐる。

「おはようー。」

小学校のころからの幼馴染  
中村翔子。

いつものとおり。

笑つて声をかけてくる。

「…あ、おはよう。翔子」

「どしたの？」

何か元気ないね？」

昨日メールしたけど  
なんか返事ないしー。  
最近ノリ悪いよー。灯<sup>あかり</sup>

「…あのね…」

「シヨウ、おはよー！」

昨日の宿題で  
わからんないとこあつてさあ。  
教えてくんないー？」

他の友達が  
翔子に声をかけてくる。

あ。また。

「いいよー。わかる問題ならうなつ

きつかけを無くしちゃった。

タイミングが難しいんだ。

翔子はアイドルみたいに  
可愛い。

可愛いだけじゃなくって、

性格も明るくて優しい。

これで運動もできて  
頭もいいってなつたら…。

みんなほつとかないよ。

男の子はもちろん、女の子でも。

ちょっと気が強いけど。

あたしはそんな翔子の性格、  
大好き。

でも、翔子はいつも忙しいから。

あたしは深刻な話は  
タイミング失うんだ。

アイドルの曲がどうとか、

昨日見たテレビとか。

そんな話なら簡単なのにな。

だつて。

昨日のことなんて。

どうしてあんな事  
されなきやいけないのか、  
あたしにだつて  
わからない事なんだから……。

どうから言えばいいのかな。

あ。

かえつてこんなトラブルの話、  
迷惑にならないかな？

とか考えちやつて。

メールしてみようかな……？

『昨日、5人の先輩に囲まれて

バケツ水かけられちゃって

大変だつたんだ！

真先輩に

関係があるらしいんだけど

あたし真先輩と

話もしたことなんてないのに

何でかな？』

.....。

打つてみたけど。

ダメだこれ。

暗い。

内容が内容だけに…

明るくしようが…ない気が…？

こんなん送れないや。

ホームルームが始まった。

担任の出口が何か言つてる。

だけど今日はそんな内容も頭に入つて来なくて。

頭の芯がぼつーとしてる。

ガラツ

え？

教壇の先生が  
ポカンとした顔をしてる。

先生だけじゃなくつて  
教室のみんなも。

なに？

勢いよく開いた戸に  
立つてるのは男の子。

身長が高い。

色白で、痩せてて。  
髪は黒くて短い。

目が綺麗。  
きれい。

髪、脱色も何もしてないのに  
ちょっと目立つ感じの…。

「おい？お前のクラスは隣だろ。  
何寝ぼけてんだ桜井」

山口先生が

その男子生徒の名前を呼んで  
注意してる。

へえ。

隣のクラスの担任にまで  
名前覚えられてるんだ。

目立つ風貌だからかな？

何にせよ、  
あたしとは違うタイプで  
世界がちが…

え？

その男子生徒は  
みんなの注目も気にしないで  
こつちに来る。

「アンタ」

…は…？

「名前は？」

え！？えええ！？あたし？

「涼<sup>ひやう</sup> ナンパかあ？」

クラス中がどつと笑った。

やだ。恥ずかしい。  
こんなのつて…！？

「ぬせえ、渡辺。黙つていろつて」

クラスでお調子モンの渡辺君を  
軽くいなして…。

それだけでもあたしの頭は「???.ドコツボ二だ！」

「アンタ、ちょっと来て」

「あ、あたし…！」

あたしの右手首を強く掴んで、  
そのまま引つ張るから。

変に高い声が出ちゃって、

またクラスのみんなに笑われた。

「桜井、コラー？」

山口先生が追つて来ようとする。  
けど

騒ぎが大好きなクラスメイト達に

止められてる。

翔子が

「何? どうしたの?」つて顔で  
あたしを見る。

あたしにもわからんないよーーー!

助けて!

そして。

引きずり出されるように、  
あたしは教室を後にした。

### 第3話 ～屋上少年、屋上少女～

空が高いや。

屋上に引っ張って行かれて、  
あんまり空がキレイだったから  
見とれてたら。

「お前は？」

その桜井涼つて男子が  
そうぶつ起きりぱつて叫ぶ。

「……そっちこれがお前は？」

思わずこいつちも  
ぶつ起きりぱつて叫ぶ。

さつき先生や渡辺が言つてたから  
覚えたけど。

だつて！－ヒドイよ。

一時限田の授業、  
どうすんのよ。

一応口口、進学校だよ。  
内申とかあるんだよ？

そういうので

大学推薦とかだつて決まるの。

サボるのなんて初めてだよ？

つい目めが睨のぞんでしまう。

「まあいいや。

：里美、れいみ、  
出て来な

いいのか！？

と心で突つ込みを入れてた時。

桜井涼が『里美』と呼ぶと

給水タンクの影か  
女の子が出てきた。

「 じの う… ？」

里美って呼ばれたオンナノコが桜井に聞いてる。

同学年かな。

上履きのラインの色が  
1年の赤色だ。

「 もう。 じこつ

「 イツってなに。  
初対面なのに…。  
いいけどね。

その里美って呼ばれた女の子があたしの前に立つ。

「 じめん

その口が小さい声で謝った。

「な、に…が？」

訳がわからなくて。

あたしはそう聞いた。

「つまり！」

アンタ。

昨日3年の女どもに  
水かけられただろ？

あれな、

里美と間違われてたんだよ。

身長も似てるし。  
髪形も。

後姿とか似てる

でつかい声で

桜井涼が吐き出すように  
一気にまくしたてた。

「…え。」

そう言われてみたら。

里美と呼ばれた彼女は、あたしとよく似た身長で髪も同じ長さくらいだ。

…と、言つても…。

顔立ちはハツキリしていて、カワイイ部類だ。

「だから、ごめんつてこと。な？」

「…うん」

はあ…。

よくはわからないけど。

間違いでした、と。

へえ。間違い…。

え！？人間違ひとまちがい！？

間違いで、あたし。  
あんなメに！？

「と、こう」と。  
じゃあ、アンタ  
戻つていいから」

ふぞけんな……！

## 第4話 ～う・わ・わ～

「ヒ

言つてやつたら

「みかつたのこ」

呆れ顔で翔子<sup>あき</sup>が。

あたしの頭をナデナデしている。

休み時間に珍しくあたしの机にみんなが集まって来たから。

説明したら

みんなが同情してくれた。

「だよなー。何かと思ひじゃん

「いきなり

「ああひひやないんだからさあ

「日野が相手で  
そりや無いわなあ」

男女そろつて  
みんなそう言うから。

ちょっとムツとなつたら。

「何言つてんの?  
灯は被害者ひがいしゃじゃん」

つて翔子が庇かばつてくれた。

「話聞いてみりや

だいたい灯が昨日。

先輩がたに囲まれた  
ということだつて。

あの真先輩に！

その里美つて「が！」

しつこく付き合つたから  
なんじゃん!!

真先輩つて…

彼女いるじゃんか!

翔子。

何か怒りが倍増してないか…?

「ああ、まあ…そーだけどさ」

渡辺がしぶしぶ

納得せざるをえない勢いだよ。  
翔子。

「そうだよ。

灯は放課後、  
山口に呼び出し  
くらつこんだよ?

誰のせいだつてばー!

もうだよ。

きっと説教くらひよ。

何でこんなことにして……。

「誰のせいって……。

そりや、小林里美のせい?

渡辺がスパツと言つてのける。

「小林里美? その口」

クラスメイトの風戸美弥さんが  
遠巻きから声をかけてきた。

「あの口……小学校同じだけど……。

あんまりいい噂聞かないね。

日野さん、大人しいし。

あまり

近づかないほうがいいね

「噂うわさ? どんな?」

翔子が問い合わせたけど

「いろいろ。

まあ、いろいろよ。

悪い口では  
ないんだるうけど……」

風呂さんはそう言つて。

深くは教えてくれなかつた。



## 第5話 ～そして少女は脱兎する～

放課後の生徒指導室。

説教くじう時はいつも

この階段の上にある小部屋。

この学校はそういう造りで。

そういう方針らしい。

それはそれで  
仕方ないこと

…なんだらうナビ。

だけどね。

担任の山口が軽い口調で  
お説教文句をつらつらと  
述べている。

先生にしてはまだ若いから、  
これで済むけど。

問題は。

「だから、  
だいたいの事情は  
中村から聞いたが…。」

日野。

お前もな、  
ホイホイ着いて行くこと  
ないだろ？

そして何よりお前だ！ 桜井！』

「あーい？」

何でコイツ。

桜井涼が一緒なのよ！？

何で？

「つたつて、先生。  
俺、1組つしょ？  
何で2組のセンセが指導すんの。  
おかしくない？」

「バカ。」

これで済むならヨシとしてくれや。

1組の担任の山崎先生なら  
もつと厳しいだらうが」

「そりやあそーですケド」

「ハイ。反省文提出な。

1時間で書けよ。

後でまた来るからな」

と山口先生は

扉を閉めて出て行つた。

「はあーー」

つてオイ！！

2人つきりですかいつ。

山口先生！！

「…………」

「…………」

気ますい。

生徒指導室は  
陽あたりがよくて。

空気がゆっくつと流れで。

おまけに静か。

「…………」

つて静かすぎるのでしょうかーー?

あたしのシャーペンで  
反省文書く音しか聞こえない  
つてどうこうつ事?

がばつと勢いよく顔を上げると。

桜井は  
机に突つ伏して眠つていた。

「…………何だコイツ…………」

桜井の作文用紙  
チラリと見ると。

何も書いてない。

え？ 寝る？

それで、眠れる！？

何て不マジメな奴…。

あたしは呆れた。

軽蔑つてあんまりしないけど。

この感情は…

ケイベツしたつて感じかも。

だつて。

ひつなつたのはそもそも。

小林里美さんつて「のせい  
かもしないけど。

そもそもはコイツが  
教室に乗り込んで来て。

あたしを屋上に  
引っ張つて行つたから  
じゃんか。

…あたしなんて。

根源こんげんは何が悪いかなんて  
わからないけど。

着いてつたのは  
(いくら引っ張られてムリヤリでも)  
あたし自身だから。

そういうのがいけなかつたなって  
思つて。

授業は

途中からになつちやつ…。

ノート取るの遅れて、  
翔子に借りなきやで  
迷惑かけたし。

腑ふにおちないけど。

一応反省はしてて。

ちゃんと文書に書いたの。」

髪も黒くて。

マジメな人に見えるの。」

何だか…態度はだらしない。

だけど。

何でこんな奴。

山口先生には

可愛がられてんだわ。

そういうやー組つて。

特進クラスじゃん。

頭もイイの。」

なんで?」

「うわあ跳つちました!

今何時?」

いきなりがばつと起きて、  
騒々しく叫ぶ。

あたしは反射的に  
びくつとしてしまった。

「ね、ね、今何時？

俺せんせん書いてねーの。  
何書いた？ちょっと見せて」

あたしのペースには  
かまわずにそう言つて、  
桜井はあたしの反省文を  
奪つた。

「あ、名前。

ひのサンっていふんだ？」

「コレ、あかりって読むの？」

あかりチャンかー。

なあ、見せてもらつていいい？  
ちょっと文章変えて書けば  
時間にまにあ……」

あたしは作文用紙を  
無言で奪いかえした。

だつて！

だつてこれは  
あたしが書いたものだ。

あたしのだ。

「え」

少しムツとした顔で。

桜井はあたしを睨んだ。

こ、こ、こ、怖くなんか  
ないんだからねつ……。

「……やんとつ

……じぶんでつ……か……」

怖くなんか無いんだからつ。

「か？」

「か、か、…かいたら…？」

なんで？

たつたこれだけ  
睨まれただけで。

相手、男の子だから。

体格、デカイから。

あたし、チビだから。

だから？

なんで。

泣いちゃうんだろう。あたし。

「げ

桜井せりゅうとおひで。

おたおたしている。

そして深くため息をついた。

「アンタを？」

そんぐらいで泣く？ふつー？

名前だつて口をかんなら

里美の前で言えよ。

聞いてたんだからや。

そこで泣かれたら

いつもが悪モンみてーだね。

つまんねえヤツ。

クソマジメやがんだよー。」

桜井せりゅうとおひで。  
やつして、

…何だよ。

何だよ。

何なんだよ「コイツ…！」

手が震<sup>ふる</sup>えてきて。

思わずあたしは

「何だよ…」

あたしは昨日から…

訳わからぬことばっかりでつ。

あたしが迷惑してんだからつ。

迷惑かけたのは  
そつちじゃんか！

そんでこんなこと  
なつてつ…。

何でそれ  
怒鳴<sup>とな</sup>られなきゃなんないわけ！？

そつちだつて

里美ちゃんだか何だか  
知らねーけど、

かわりにアレコレ  
動いちゃつて！

そんなん…

本人に任せとけば  
いいじゃんか！

彼女でもちよつと  
過保護すぎんじやないの！？』

一気に怒鳴りかえしてしまった。

最悪。

最悪だ。

あんまり怖いから。

あたしはその場から逃げだした。



## 第6話 ～そして少女は自己嫌悪・なのじひじり恋相談～

嫌になる。

「」の委員長体質？

（つて言つても。  
しがない保険委員）

「」の委員長体質？

優等生？

頭力タイ？

マジメ？

オトナシイ？

自分でイヤんなる。

あんなん。泣かずには通らんやんつで。

『うわちが悪モノみでーだらー』 つて桜井涼の言葉。

アタマの中ぐるぐるして。

図書室で、

翔子の部活が終わるのを待つてゐる。

こっしょに帰る約束してたし。

それに…こんな感情。

べつやつて整理したらいいか。

喋つて少し楽になりたい。

本を読むフリして少し泣いた。

そんな時。

「ね、田野サン…？」

隣に座る女の子がいて。

その「は小林里美ちゃんだった。

「日野サン、だよね…？」

「あ…今朝の」

「うん。  
あたし小林里美。  
サトノリて呼んでいいよ」

「う、うん」

ちやくべ。

華奢きやしゃで。

似てるの? そのへりこ?

どうしてこんなカワいい? と間違つんだか。  
先輩たちって。

「涼くんが何か言つたみたいで。

『めんね』

「え?」

何で知つて? ?

顔が赤くなる。

ああそつか。

彼女サンなんだっけ? ?

「ちゅうと相談にのってくれるかな…？」

「え？」

里美ちゃんが急に話しだした内容は。

あのね。

あたし涼くんと付き合っててるのね。

それは入学式のあと、  
涼くんに告りられてね。

何となくだつたんだけど…。

やれじこっ。

付き合つてたの。

よくあるよね？

やうこつ。

でもね。

あたし。

初めてあたしから好きな人が出来ちゃって…。

それが真先輩なの。

だけど

あつちにも彼女がいて。

あたしにも今彼氏がいてね。

それでも真先輩、

あたしがいって言つてくれてるんだ。

だから

いつかは涼くんに言わなくちゃって。

そう思つてるんだけど。

なかなかそのキッカケが無くて。

こんなことになっちゃってるの…。

それで灯ちやんに迷惑かにやつて…。

謝りたくて涼くんに相談したい。

涼くんつてひょつと向ひ見すだから。

だから、ね。

今朝みたいなことになつちつて…。

じめんな。

それで…。

「あれ。今、何時？」

「え？」

「話の途中でじめん。

あたし

翔子といつしょに帰る約束してて。  
もう時間に……」

「……帰つちやつの……？」

里美ちゃんが涙ぐむ。

え。

困つたな。

「ひょりと翔子にメールするね」

「いいよ。

そうだよ。

今日はメールして、断つていよいよ。

里美の話

聞いてくれるつて言つたんだし

「え」

そういう意味で言つたんじゃ  
ないんだけどな…。

翔子に少し遅れるつてだけ  
メールしようとしてたんだけ…。

「里美、  
すゞぐ…困つてるんだ」

里美ちゃんはそう言つて、  
大きい瞳からポロポロと涙をこぼした。

「な、泣かないで！」

「わかつたから」

仕方ないな。

今日は付き合つか。

翔子には断りのメールをいれた。



第7話 ～そして親友、アンタもか～

『ねー。

今日は  
どうじゅやつたのー？

あたし、  
話したいこと  
あつたのにい！』

翔子が携帯の電話口で  
そう訴えてきた。

もう時間は夜で11時。

あたしは自分の部屋で  
宿題やつてた時だ。

「うめんー

ちよつひと

いじるこりあつて…。

あたしも話したいこと  
あつたんだ

何から言えぱいのかな。

『もー。何だー？

恋バナ？ れては恋？

付き合に悪いもん！ 最近。

そーでーはあ、恋だなあー…。

「違ひつぱー。

もー

翔子はずべんしなんだからー

なにから

話したらいいのかな…。

そーいや。

翔子の話つて何?  
そつち先にしょひ。

話あつたから  
電話して来たんでしょう?』

『うん…。実は…ね。』

「何? なに? 恋かな?」

ひやかしでやつつけたら翔子は

『ピンポーン!』

あたりです。

1等賞です』

そう言つて。

『あたしね、

佐藤真先輩のこと

好きなんだ!』

明るく笑つて。

そう言つた。

「え。

わ…とう まいと

……真先輩!?』

ダメだ。

あたしの話は…

…今日の話は…

言えない…

「真先輩つて…

す、好きな人いるんじゃ…」

『わかつてゐよー！

彼女いるじゃーん。

坂田亜季さんつていう3年の

そ、そうじゃなくつて…。

いや、そなんだけど…。

尊の彼女さんは  
坂田亜季さんつていう

陸上部で  
マネージャーしてる人。

美人で長身で

オンナノコ達だつて  
憧れてる先輩で。

でも真先輩つて。

里美ちゃんの話だと…

…。

里美ちゃんのことを…。

『美人の！  
大人っぽい！  
3年の！  
真先輩より年上の！  
彼女！

でも  
好きになっちゃつたんだもん。

しょーがないじゃん……』

何だ?

『の展開は……！？

『ねえ。

モチロン 灯は……

協力してくれるよね？ねつ！？』

## 第8話 ～真先輩、ナニモンだ？～

美女ばかりを惑わす

佐藤真先輩とは。

ナニモンか？

校内の有名人。

ルックス最高。

ちょっとハーフかかってんじゃないかな。

頭良し。

何か学校設立以来の成績だとか…。

塾も行ってないのに

全国模試でヒトケタの成績だとか。

陸上部の短距離工ース。

何でも？

バレンタインには

チヨコレートがダンボール一箱は届くとか。

いろいろ伝説にことかかない。

なんか？

中学の時の修学旅行では

有名モデル事務所にスカウトされたとか。

でもそんなんは  
まるっと興味なくて。  
断つたらしい（！）とか。

こじは田舎でちつちつな市なんだけど、  
市長さんのお孫さん。

お父さんはでっかい建築業の…。

つまり地元では有名なお金持ち。

都会に出ると

ケタが違う人はいるんだろう。

生まれ育ったココでは  
影響あるんだ。

でも。

あたしは性格なんて知らない。

ただクラスの女子みんなで、  
いつしょに遠からキャーキャー言つてるだけで。

だつて世界、違うじやん。

ああいう人は

遠くで憧れるから楽しいんだし。

学年違つし。

中学だつて違う。

オンナノコ達は頑張ってるよ。

いろいろプレゼントとか。

色じかけの誘惑とか。  
されてるって聞いたけど。

何だか特定の彼女サンがいるから  
他のオンナノコには  
見向きもしないって噂。

どつかの高校の  
ミスなんとかサンが言い寄つても  
振つたらしいし。

だから

よけいに人気、あるんだよね。

彼女の坂田亜季さんだって校内では有名人だ。

綺麗で優しくて。

ちょっと大人しくて。  
頭良くて。

背の高い、キレイなキレイな人だ。

生徒会長などもしてたり。

家は普通のサラリーマンの「家庭らしいけど。  
でも2人セツトで憧れてる口も多い。

あれ。

翔子に協力つて…。

あたし何すんの？

あんな人。

翔子に振り向いてくれるのかな？

いくら翔子でも…。

『だけどあたしがいって言つてくれて……』

あれ。

たしか里美ちゃんは  
そう言つてた。

……つて云ふは……。

真先輩と里季さんは……

別れちゃうの……？

ええええーー？

何が不満なんだ里季さんのーー？

つていうか…。

里美ちゃん…。

里美さんより里美ちゃん?え?

……。

似てる…といふ。

似てる…といふ?

お、大人しい…といふ?

?????

あたしの頭の中は謎だらけだよ…。真先輩。

## 第9話 ～たつたひとつしかない初恋～

「春つて。

イベントがないんだよね…」

次の日の放課後。

校庭の隅っこで

陸上部の練習を見ながら。

翔子がため息をつく。

「うん。

イベントつて

全て冬だよね」

せめて

バレンタインとか近かつたら…。

とか思いつつ

そう答えたから。

「だからこそ！  
敵も少ないと思うのー！」

力こめて翔子が言った。

「そうきましたか…。

翔子はポジティブだなー！

好き。

好きって。

憧れと

何が違うのかな。

「ねえ翔子

「なに？」

「なんで、  
好きなの？」

聞いてみた。

だつてなんか。  
イヤだつたんだ。

あたしが大好きな翔子が。

強くて、  
可愛くて、  
優しい翔子が。

他の女の子みたいに  
ルックスが好みだとか。  
そういうトコだけ見て  
『好き』って  
思ってるんだとしたら。

なんかイヤだつたんだ。

「理由なんかないよ」

「え？」

「そりゃ…。

はじめはただの  
ミーハーだったよ？

でも あたし。

話もしたことない人。  
きっと好きになれない。

今までだつて

そういうのって…

あたしに告つてくるヤツ、  
断つてたじやん？」

「話、したことあるのー?」

翔子が

今までどれだけモテて来たかは  
もう知ってるから、  
ソコはひとつからずに。

真先輩との接点があるのに  
驚いた。

「あるよ。

あたし、

入学式で宣誓読んだじやん?」

宣誓つていうのは…

入試でトップだった生徒が  
読むアレだ。

「無理してさあ。

受験勉強してさあ。

あたし、確かに

超マグレでトップだったさあ。

だけど。

世の中には  
いるんだよね…。  
無理しなくても  
デキル人つてのが。

次のミニテストで  
バレちゃって。  
アタシの頭のレベル。  
氣いぬいたら  
すぐ成績なんて落ちた。

でも。

ちょっとうかれてたんだ。

自惚れ？

つての？

そういうの…

見る人が見たらわかるんだよね…。

廊下で

すれ違いざまにわ。

『イイ女がいると思つたら。

違つたな』

つて

イヤミ言われて。

何だよソレ。

ふざけんなつて

アンタに

あたしの何がわかつてんだ？

つて  
くつてかかつたら「

ちょっと待て翔子。

なぜソコで。  
売られたケンカを  
直後に買うんだ?  
あたしが頭を抱えていたら。

翔子は

ふつとキレイな表情で笑った。

「『はいはい。

イイ女になんなさい』

つて

頭ポンポンつてされて。

それが

真先輩だつたんだ。

イヤになる。

まるで子供扱いなんだもん…」

翔子がシュンとして。

ホントに子供みたい

体育館横の石階段ににづくまつた。

「でね。

何を間違つたかあたし…  
体育委員に選ばれちゃつて。  
そしたらね。

真先輩もそうで。

しそつばなの委員会の書類で  
ちょっとトラブルつたのね。

そした、「ひ。

何も文句言わないで。  
助けてくれたの。

それから廊下とかで会つたら  
声かけてくれるようになつて。  
なんとなく、立ち話とかしてたら。  
そしたら。

なんとなく、ね

…。

ふーん。

翔子の何度もかの恋は。  
そうやつて『なんとなく』  
はじまつたのか。

「なんか…。

みんな

女の子なんだねえ……

「……」。

灯?

何でそこで枯れでんの……?

アンタだつて

オンナノ口でしょ！？

これから

初恋のひとつやふたつあるの……

すく立ち上がって

勢いよく翔子がそう言ひ放つから。

「……翔子。

初恋つてのは。

たつたひとつしかないから

『初恋』つていうんだよ……』

と、あたしは答えた。

## 第10話 ～それは略奪愛妄想計画～

略奪愛。

なんか書くと

…お皿のメロディマ…

みたいな？

とにかく翔子のレンアイは  
略奪計画なのだ。

敵は

亜季さんに里美ちゃんに。

校内に多数いる  
ファンジもなのだ。

あたしは翔子といつしょに

ノートを開けて  
もくもくと計画を考える。

「だからー。

## 何でノートに書くのよー。

勉強違うんだからあ！」

はじめ翔子は異論をとなえた。

だが！

「へたに人にみつかつても  
ヤバメだから。

ちやんと

AさんBさん  
つて書くの。

それにね。翔子。

二二七

書くことによつて  
目標が定まるのよ。

受験と同じよつー！」

同じかどうかは確信はないぞ。

でもなんか。  
弱つてる翔子は  
らしくない。

だからついつい力んじゅう。

ノートには

翔子がカワワイイ文字で  
思いついたアイディアを書いていく。

「敵は多いんだよ！  
やるならしつかりしなー！」

そばであたしは励ます。

励ましになつていいかいないかは、

…“ひつだりひつか…。

「なんかー。

ひがうー。

いやー。

なんか  
乙女ちがうー。

青春ちがーう。

ペチピチしてないー！

キヤンキヤンしてなあー！

なんてゆーか…

ヒコーヒコーしてゆーかあ？

歴史小説ホコリっぽい  
つてゆーかあ？

灯つて

：策士？策士？

「何をいまさう。

恋愛だつて

方程式や

攻略法や

心理学が関係してくるのにちがいないわ。

まちがいないんだから！」

あたし。

本当か？

「うーん。

そうなのかもねえ。

やだ。

どうじよつ。

計画書いただけで

もう成就しちゃいそつな気が…

それでも  
どこか素直な翔子は  
一心不乱に作戦を書いている。

「甘いのよ。  
気になつただけじゃあ  
甘いのよー」

何だか楽しくなつてきた。

わかつてこるや。

机上の空論だつてコトは、や。

だけど翔子も樂しそうだ。

「ねー、もしね。  
もしもよ?

成就なんかしちやつて  
付き合つよーになつたひそかー

あたし

絶対元カノさんに  
恨まれるよねえ……？」

妄想話でもりあがる。

「ソコが心配なんだけどね。

こういうのって

本人より……

友達が厄介だよね……？」

「え？」

「漫画やドラマでは  
元カノがすごいやな性格で。  
よく復習劇に出たりするよね？」

でも。

あの亜季サンがそんな人に見える？

あたしの勘では

あの人はそんな人ではない！

だけど

亜季さんの友達は厄介よ。

だつて……あたし……

困まれたし！

バケツ水  
かけられたらし！！！

人間違いだつたけどねつ

あ。  
なんだかこれじゃあ…  
あたしの復讐みたいだ。

イヤな感情に気がついて。

言いながら、ちょっと  
あたしはへこんだ。

「……そつかあ……。

今はいっきいいっきいで。  
そこまで考えてなかつたよ。

なんか……。

険しい道のりなんだ。  
あたしの恋

「……

それでもなんだか  
ひどく翔子は納得している。

「うん…。

ハードル高いよね」

「障害物競走なんだあ…」

「先輩は短距離種目なのに…」

そう言って合いながら。

恋愛からほど遠い話になつていて気に気がついて。

顔を見合させて、  
あたし達は笑つた。

## 第11話 ～夜中、アカリは絶叫する～

そうやって

浮ついていられる時間だつて  
限られているんだ。

あたし達は勉強をする。

2年になるまでに

理系か文系かを選んで。

3年は行ける中から

まだ行きたいかなーって大学を選んで。

ずっと大学受験に備える。

あたしは何になりたくて。

何になれるんだろ？。

最近科田、とにかく  
テストが増えた。

追いつかれないよ、  
せいいっぱいだ。

大人になるつて…

みんなこうやつてガマンして。

詰め込んで。

あたしは要領悪いから。

なんか…。

テレビドラマに出でるような

ものすんじいキャリアなんかはつめなくて。

ヒロインっぽい  
クールビューティーとかなんか  
絶対無理だよなあ。

隣の席の男子、  
浜田が大声を出す。

「数学のノート、  
提出お願ひします！」

浜田の『せ』と、田野の『ひ』。

あたしも口直だったから、  
何だかこういう雑用まで任される。

苦手なんだけどな…。

「ひのぢゃーん。

俺、部活急ぐの！

悪い。

ノート、

職員室まで持つてってくんね?」

「ういう時だけ、  
なれなれしく浜田が甘えてくる。

何で男子つて…  
「ーもコドモ?」

あたしが大人しいからかな。

可愛いわけでもないし。

だから態度、こんなん。

なんで、もつーーオトコつて。  
相手によつて態度こんなにロコジ?

「しかたないね。

…いいよ。

集めてくれたの、  
浜田だし…。」

「じゃー、よろぴく!

日野ちゃん、  
マジメで助かるー

何がよろびくだ。

一ホンゴ喋れ。

…と。

言える性格なら楽だよねえ。

それでも浜田は悪意ないから。  
まだ楽だ。

アレはアレで  
あたしが大声出すのとか  
苦手なのを知つていて。

さう気なくフォローはしてくれてる。

フォローだけなんだが…。

それは許せるくらいで。

もつとひどいヤツになると、  
まったく作業になんない。

…このクラスは…

そういう人は、いないかな。

渡辺くらーが！――！

ま。

『ひ』のあたしには  
『わ』の渡辺は  
関係ないからいいけど。

それに。

渡辺の日直相方は

矢野さんというハキハキした女の子だから、  
がんがん言いくるめられてる。

何というか。

女の子は総じて  
しつかりしてる。

「よいつしょり」と

2組の42人分のノートは、  
少しだけ重い。

「…ん?

…いや、に、せん…」

…ノート…

一冊足りないんですけどお…?

もしや と思い、

最後のノートの表紙、名前を確認したら。

あーあ。

やつぱぱ『渡辺』だ。

ヤツは

- 8 -

やうやく田舎の仕事をしないし、

## 数学の宿題。

## 数学教師の畠山は

学年主任で超厳しい。

けど。

あたしのせいじやないし！

## 職場について。

ノートを左手で支えて  
何とか引き戸を引こうと格闘してたら。

ふいに戸が開いて  
先生（誰か見えない！！…どうせチビ！）が  
出てきたもんだから。

クラスぶんのノートと  
あたしの鞄。

廊下にバラまいた。

「……どうこう器用な落とし方をしたひ。

「うなる?

日野よ……」

ちょっとトボけた声で、  
体育教師の秋山ちゃん（41歳男性・既婚者）が  
あたしに声をかけた。

同情するなら  
手伝ってくれえええ。

そして夜。

皿や。

部屋で。

お風呂あがり。

あたしは気がついてしまった。

できれば

気がつかないままが幸せだった。

背筋が寒くなる事実。

翔子から預かっていた  
ピンクの表紙の

『略奪計画ノート』が…

カバンにないつ！！！

## 第1-2話 ～非常階段の命令～

いつもの  
何もない1日がすぎて。

1日中  
ノートがどうなっているのか  
気にして。

でも  
何もなくすぎていく時間に  
ただ失くしただけで  
とくに  
何があるつて訳でも  
無いのかもつて。  
ただの散文さんぶんだつたし。  
つて。

そう思えはじめた放課後。

「ちよつと来てくんない？」

最悪なヤツに  
ひじょつかいだん  
非常階段に呼び出された。

桜井涼だ。

「イヤ」

そう短く言つて  
突つぱねよつとしたら。

「これ

オマHんのだろ

アカリチヤン」

桜井の右手には  
あのノートがおさまっていた。

何で?

何でよつによつて

桜井涼が

あの『略奪計画ノート』

持つてソニーいるの？

「かえして！」

手を伸ばして  
ノートを取るうとしたけれど。

身長差がジャマをした。

「オマジで

真センパイのこと  
好きなんだ？」

耳元で桜井が囁いた。  
さわわや

「何言つてんのーー？」

ぎょっとした。

あわてて辺りを見渡して  
誰も聞いてないのを  
確認してから

「行くから！

非常階段！

…だから静かにして

ちっちやな声で  
あたしはそうひつた。

\*\*\*

「そのノート…  
返して」

何で

あたしはそんなノートの表紙に  
律儀にフルネーム  
書いていたんだろう？

後悔ばかりだ。

授業で使つつもりだったから。

だからだ。

「レンアイに興味ありません  
つて顔して  
なんかエグいよな

オマエ。

彼女であるアキから  
真センパイ  
略奪しようって？

やめとけやめとけ  
叶いつこないから

「何言つて…」

そこで思い出した。

そのノートの中にだけは

名前が書いてない！

「ほんと意外」

意地悪そ<sup>う</sup>な表情<sup>かお</sup>。

イヤだ。

「イツ、

あたしにいい感情  
持つてない！

「アンタ  
俺の言つこときけよ」

それって  
どういう…意味。

「今  
アカリチャン  
どういう状況かわかる？」

入学してそろそろ  
真の彼女のアキ  
そのオトモダチに  
バケツ水かけられたよな

「あれば  
人違いだつたじやん！」

そう。

あれば

里美ちゃんと間違われて。

「だけど、だ。  
ヤツらに

その誤解は解けてない」

「え？」

ぞつとした。

そうだ。

里美ちゃんには  
謝られたけど。  
だからって  
そんな理由は  
亜季さんの友達の  
彼女らには…  
伝わってるわけが  
ないんだ。

どうじよつ。

足が震えた。

「あんた…。

亜季さんの

なに…？

名前

呼び捨てるべから  
仲いいんだつたら…  
説明してくれたら…

「何で？」

「だつて  
仲いいんでしょ、つー？」

「家隣だから。

昔から仲はいいよ」

「だつたら」

「だけど

なんで俺が誤解とく必要

あんの？

わざわざ「つちが」

何の義理あつて？

意外と

間違いじやなかつたし？」

だから、それも！  
真センパイのことを  
好きなのは  
あたしじゃなくって  
あたしじゃなくって  
翔子…  
…。  
そんなん。  
言えないじゃん…。  
コイツにそんなこと言つたら。  
今度は翔子が…  
からかわれて…。  
真先輩を好きなこと  
バレて。  
翔子が恥をかく…。

今からなのに。

まだこれから  
翔子は頑張らなきゃ  
いけないのに。

「……」

「なに？」  
「また泣くの？」

握り締めた拳。<sup>いぶし</sup>

「イツの腹に  
思いつきり  
くらわしてやりたい。

けび。

顔を上げた。

「泣かないわよっ！

誰が泣くのよつ。  
泣いてるヒマなんて  
ないのよつ！

桜井が少し  
呆気にとられた顔をした。

「何でも！

アンタの言つこと  
聞いてやうひやないの！

あたしは高らかに  
声をはりあげて宣言した。



「いや  
だからって…

アンタ…  
色気ねえな」

なぜ言い出した張本人おさなうほんにん、  
桜井が困る？

「もうちょっと  
……。  
つていうか  
かあなありい！  
何とかしてもらわんと

「なに？  
ノートくらいなら  
いくらでも貸すけど?  
ノートって言つても  
“それ”以外のだけど

言つこと聞くから  
そのノートは  
かえしてよ?「

どうせコイツ。

授業中。

寝てんだろうし。  
そんな気がする。  
渡辺と同じニオイがする。  
アタマはいいくせに。  
ノート提出時  
困るクチと見た。

「……」。

それに。

ガキ

桜井が

冷めた声で呟く。

あんたに

言われたくないし!

妙に腹が据わつてきて  
クールにそう心で突っ込む。

言えないけど。

「俺の指令  
全てこなせたら  
ノートは返してやる」

桜井が不適に笑った。

「ほんとーーー?」

でもあたしは  
それで  
少し安心した。

でも。  
待て。

指令つて何だよ。

奴隸かよ。  
下僕かよ。  
手下かよ。  
…それに近いモンは  
あるのか?  
…。

選択を

誤ったかもしれない……。

「 だけどもう  
そんなこと  
言つてられない。」

「 これでもあたし。  
もうすぐ  
誕生日なんだよ」

「それを聞いた桜井が  
怪訝な顔をしてる。  
なんで?」

「……。

「 メガネ取つたら  
実はカワイイとか?」

「 やだつ。  
なにすんの」

メガネを外される。

「 ……び、  
微妙?」

「なにが！？」

失敬しつけいだなつ！

視界しけいがボヤけるから。  
やめてほしい。

「そうか。  
そんな  
古典的少女マンガ展開は  
ムリムリかつ」

「なんで  
うなだれるのつ！？」

桜井が

あたしにメガネをかけながら  
肩を落としてうつむくから。

「あー  
うー<sup>1</sup>  
まー<sup>2</sup>  
そのー<sup>3</sup>  
アレだな<sup>4</sup>

オタク共が好きな

萌え系とでも…

ムリヤリ

思い込んだら

……。

何とか？

俺の好みじゃ  
ねえけど…。

原石と思いつめば

ナンとか

急に

階段に座りこんで  
考えこみ始めた。

何、思考迷走してんだ?  
コイツは?

原石。  
げんせき

それで思い出した。

あたし、

もうすぐ誕生日だ！

「あたし、  
原石だよ」

「あ？」

「誕生石

ダイアモンドだもん。

でも

まだ成人してないし。  
ダイヤとかって  
まだ似合わないし。

恥ずかしいから

原石だって  
思うことにしているんだ」

「それだ！」

「なにつー？」

桜井がぱつと  
あたしを見上げて  
指差した。

「オマエ、今。  
若いつづーたな？」

そーだよなー。

何か1つくらい

イイとこないとなあ

やつてらんねーし

「勝手に何か  
納得されてる。

若い?  
そんなこと  
言つてないぞ。

じつさい回学年だと  
4月生まれって  
歳1ヶ月違つじやん?

ただ

誕生石のダイアモンド。  
似合わないって  
言つただけで。

あたしとしては  
：なんかもう高校生で。  
歳くつた気が  
してんだけ?」

「…桜井も

若いじゃん

同学年だよ?」

「若いから

いろいろあんじやねーかよ」

そう言って笑った桜井。  
でかい**図体**<sup>ずうたい</sup>して  
ゴドモつぽく見えて。

何だ。

コイツ、  
けつこう  
イイヤツ?  
少しだけ  
そう思つて  
笑えたんだ。

## 第14話 ～怪しい指令～

日曜日。

本当は塾があつたんだけど。

携帯メールに昨晩  
指令が来た。

とうとう来たか…。

だけどその内容で  
あたしの携帯を持つ手は  
怒りで震えた。

『自分の貯金通帳

カード持つて

斎木公園 朝10時集合』

カツアゲか！  
こんのお不良がつ。

金か！？

すんげえ遠回りな脅し。

怒り心頭で

それでも一応行ってみる。

額によるけだ

イザとなつたら警察行へ覚悟だよ。

公園まで歩いて行くと

居た。

桜井涼だ。

ベンチに座つてキョロキョロしている。

「来たけど？」

「ジーパン…。

……はあ

なぜソコでため息！？

気分悪いのはこいつですが！

「……まあいい。

行くぞ」

「つて。  
いくらいんのよつ?  
場合によつたら

あたし

警察行くからねつ

「ケイサツ?

また妙なコトを…。

あー。

手始めはまづ

5、6千円つてとこだな

「そんだけえ?  
肝がちつさいな。  
通帳カードじゃなくつても  
お小遣いで足りるじょん!」

怒つてるから。

あたし。

バンバン嫌味言える。

「は？」

「はいっ！」

これで終わりにしてよねっ。

ノートは？」

5千円札おしつけて。

手を出す。

「俺に払つていいとするー。？」

はい？

「ああ！

なんか誤解してんだろう？」

誤解ちがうもん。

「いいから

着いて来いって」

先に早足で歩きはじめたから。

あたしは慌てて着いて行つた。

その日の一日の行動……？

……。

なぜか眼科に行かされて。

使い捨てコンタクトを購入。  
(もちろんあたしのお金で)

その後、カードでお金おろして……。

「…オマハ…

この額はなんだ?  
貯めこんでんなあ

とやたら関心されて。

5万円卸されて。

そのお金で  
(しつこいけどあたしのお金だ

今までのお年玉とかで

30万ある

親類多いから

あたしん家)

美容院行かされて。

何か知らんが  
勝手に髪型決められ。  
少し色まで！  
染められた。

「こんぐれーバレねつーて

桜井は楽しそうだ。

「次！時間ねえから！」

もう夕方の6時だつたけど。

次は…

なんか？

高そーなブランドの店に連れて行かれて。  
…高いいつていつも  
超高級つて訳じやないけど。

あたしひとつでは

高い

つてだけの。

洋服。

たくさん。

買った。

(いい加減しつこいけど  
あたしのお金だ…)

「指令1。

完了な」

やたら「機嫌で。

桜井は笑つてた。

……。

これは

なに?

\*\*\*

ファーストフードのお店で  
いつしょにバー ガー食べながら。

「この労力、わかるか?  
オゴレ。  
これくれーはオゴレ。  
コレ指令違うが  
少しさは労われ!」

「ひるさいから。」

「<sup>お</sup>箸るからー!」

そう<sup>ヒツヒツ</sup>と  
やつと静かになつた。

「でも…  
なんで?」

聞いてみた。

だつて理解できないんだもん。

「あー。

少しばかりか。

ま

少しばかりで

マトモに女に見えるだろ

意地悪言つ。

そのすぐ後で

「けつ」——可憐いじやん

つて。

マトモに女に見られて。

あたしはゴーデダ「みたく真つ赤になつた。

そしてその日、家に帰つて。

何だか桜井つて。

オソナノコの扱い。

慣れてるな。  
つてそう思つて。

だつてあたしが  
楽に話せる。

変な奴。

つて。

買った服を眺めた。

月曜日。

朝、翔子と会つ。

目を真ん丸くして

翔子があたしの頭をくしゃくしゃにした。

「せつかく髪結んできたの!」

「だあつてえ!

髪型、

カワいいくなつてんだもん!

下ろしどきなよ!

このほーが

かわいいつてばー

翔子がゆずらないかひ。

しかたなく…。

廊下でポンツて  
翔子の頭、  
後ろから叩かれた。

「今日も色々ペー足してんな  
オマエ」

「また何言つてんですか！  
もー  
真先輩つてば！」

翔子が軽く怒つて  
その人にやり返してる。

うわっ。

ナマ真センパイ。

こんな間近で初めて見た！

背、高ーい。

カツコイイー。

……。

でもナンカ。

# 幻聴か？

今  
の  
?

「惜しきなオマエ

もうちょっと胸育てりよ  
何なら揉んでやるぞ?」

だから。

さりきから  
幻聴が聞こえるんですナビ?

「いつでも受けて立ちますからっ！」

翔子が元気よく答えていた。

「ばー<sup>か</sup>。

「オソナはコト足りてんの」

「モーニング」

ちょっと怖そつな  
でも爽やかな外見から。

毒舌：

つていうかむしろ

エロエロ大魔王な台詞が  
ポンポン出てくる。

「 しょ「い」... ?

翔子！」

「 なに？」

朝から幸せそつな翔子ですケレドモ。

「 今の..  
真センパイつー...？」

「 そう~  
朝からワッキー」

… そうかあ？

今、あたしの中で  
何かが壊れたよ…？

「でも。

「コトタリテるんだ。

ほんとに…。

嫌んなつぢや「つよねえ？」

翔子が寂しそうに笑った。

「そういや。

計画なんだけど

切り替えて

翔子が明るく言つて。

心臓が飛び跳ねた。

ノート、無いから。

「まあ情報収集する」と。

つて書いたのよ。

ノート持つて来た?」

「…

……おれちや…」

凄い緊張感だったのに。

「ああ、こーのこーの。  
覚えてるから。

まざ報告からつ

翔子がそう

何でもない事のように言つたから。  
ほつとした。

「あのね。

敵を知らなきやだから。  
まずどうこうきつかけで  
真先輩と亜季サンが付き合い始めたかつて

調べたのね。

やっぱ部活いっしょだからっての  
重要だつたんだけど。

それでも

亜季さんの「じ」が良かつたのかなあって  
考えてみて。

亜季さんとあたしって  
何かタイプがこと「じ」とく…  
違うと思つたんだ

亜季さんつて  
どつちかと言つと  
大人しいつて噂だし。

なんか?  
あたしつて  
不利だよねえ…」

翔子は翔子なりに  
頑張つて考へてるんだ…?

「でね。次よ。次。  
あたし。

陸上部のマネージャーに

なれつと頬づるだー。」

はあ?

「そんな事書いたつけ?  
あれ。

アンタ、テニス部はどりゅー。」

「辞めて来たさあー。」

「や、辞めたのー?」

凄すげる。翔子。

「3年生はこれから引退するから。

だから

これってチャンスだよね?」

そんな事まで考えて…。

「でね。

灯にお願いがあるんだ

「いいよ。

何でも言つて」

あんまり翔子がケナゲだったから。  
もうびーんと来いつて気になつて。  
あたしはそつと言つたんだけど。

「一緒にマネージャーなつてー。」

そのお願いに

あたしは天をあおいだ。

「新しいマネージャーを紹介する

あたしはジャージを着て。

翔子と並んで陸上部のみんなの前に立っている。

だから、人前は緊張するんだって。

「1年2組 中村翔子です。

頑張りますので、よろしくお願ひします！」

すらすらと翔子は自己紹介している。

おお！と歓声があがる。

翔子、可愛いからなあ。

あたしは傍で

「1年2組の日野灯です。

…

ひつひつちやな声で言つと

「なにー？」

聞こえねー」

と笑われた。

もー。

顔が赤くなってるのがわかる。

「赤くなっちゃって  
かわいー」

何か真先輩の声がしたような  
しないよつな…？

「ひら。 静かにして

ひの あかり さんつてこうのよ。  
この子。

私が色々教えてあげるからね。  
中村さんもね」

そう言つて。 底つて。

あたしの横でキレイに微笑んだのが…。

坂田里季さん。

真先輩の噂の彼女さんだ。

で。

体育教師の秋山ちゃんが顧問だった。  
知らなかつたけど  
陸上で有名な人らしい…。

つて。

うちの学校、陸上部。強かつたんだ。  
知らなかつたよ。

「まずは部室の掃除からね。  
1日で荒れちゃうから。  
結構大変よ」

亜季さんが掃除道具の場所と  
手順を教えてくれた。

「じゃあ、後よろしくお願ひね

そう言って。

亜季さんは部室を後にした。

部屋には翔子とあたしの  
2人だけになった。

「さて。やるか」

腕まくりしてバケツと雑巾持つて。  
掃除に取りかかる。

「あーん。

しょっぱながら

真先輩の傍から引き離されちゃったよ。  
寂しー」

雑巾片手に翔子がボヤいてる。

「なんか…。

聞いた話だとね。翔子」

「なに?」

「朝練とかあって。

そういうのも出なあやでね。

真先輩田当代のマネージャーって  
思つてたより仕事がキツイから  
けつこう辞めて行くらしこよ

「げ

翔子がへこんだ。

「ま、いつしょにガンバろ?」

「…うん」

ひとつおつ作業が終わつて。

ふと。

部室の椅子に置かれた陸上雑誌を手にした。

開いてあつたページ。

「真先輩出でるよー?」

「なに、どれ?」

すかさず翔子が読み始めた。

「やーん。

やっぱカツコイイ…」

何のノロケですか。ソレ。

でも。

短距離でそんな雑誌に掲載されるくらい。

凄い人だつたんだな。

真先輩つて。

何ていうか…。

運動たいしてテキナイあたしにしてみたら。

言葉悪いかもしないけど。  
バカみたいにみんな熱心で。

そんなん。

陸上で将来ご飯が食べて行ける人なんて  
限られてるのに。

何だか…

1分1秒のタイムで苦しんで。  
それを上げるために  
メニュー組んで。  
取り組んで。

そういう人達がいっぱいいて。

なんで。

そこまで…って。

時々苦しいくらいに。

申し訳ないくらいに。

だからあたし。

裏方だけど。

そのお手伝いになるなら。

走れないから。

何でもやるうつて。

素直にそう思えるくらい。  
人間ってスゴかった…。

「もう慣れた?」

救急箱の在庫チェックしてたら、  
里季さんが近寄ってきてそう聞いた。

「…はい。 だいぶ」

ちょっと緊張して答える。

「中村さんは?」

「あ…。

さつや、ドリンク瓶さんに配るために行きました

「そう。 真ね」

え?

「そつこつ「多いからね。わかるの。

不純な動機でも

やる口トやつてくれたら

私はいいのだけど…。

ちょっと見てたら氣になつてね。

裏方の仕事だから。マネば。

そういうの…

もつと理解してくれたら、とね

バレてますがな。

翔子。

心臓がばくばくして。

「灯ちやんは…

じうも違つみたい

違いますけど。

付き合いでですから、

アナタの敵ですが…。

緊張しながら聞いている。

「陸上。

好きになつてね」

そう言って。

亜季さんはあたしの傍から離れた。

……。

透明な、感覚。

何ていうか。

亜季さん。ただ大人しいだけとは違つ気がした。  
芯が、強い。  
感じ？

あの人。  
走る人が好きなんだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9325f/>

---

ダイアモンドの恋

2010年11月20日15時05分発行